

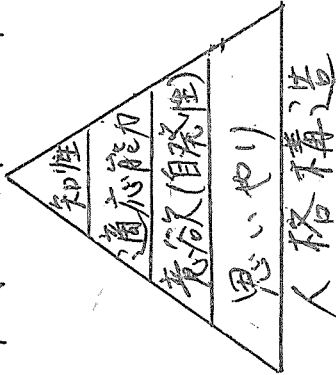
7がっのくもの会だより

〈H.29 6.22〉

ずっと春から雨が少なく、水不足の状態になってしまいましたが、
 也、と雨がきて、梅雨がきたかたにひびく。
 今年も、朝晩、ひんやりとした日が多くなっています。二か
 日中は、急に気温が上がり、じりじり照りつける日があります。
 極端な日もありません。二の気象現象にも、ほんと、まじりだすわ。
 今年の夏の雨量や暑さは、どうもさびしいのか、と不安でもあります。
 が、夏のあるべき、子ども達と共に、楽しんであげよう、まじり、厳しい
 現象にも、つきあいのりきっていきたくですわ。

〈① 人格の4つの柱〉

「思いやり」と「意欲」が人格の土台
 ~ 子どもの心の発達という二七を考える場合、私は4つの柱を
 立てて考えています。
 として、最も大切な柱から順次に層を重ねて、三角形を描
 いています。ですから、お母さん、お父さんが子どもの心を育てる
 にあたっては、下の図の下の層にある要素(まじり)に十分に注意を
 払わなければなりません。



知性はいちばん上にありすが、それが
 いちばん大切なものというわけではございません。
 むしろその逆で、人格形成の上での大切な
 の順次に言えば、4番目になります。
 「思いやり」や「意欲」といった二七の基礎的な
 要素を十分に養わなければ、知的能力の発達
 にばり力加わります、心の中を育てるから

逆三角形となり、ちよとした困難で挫折してしまふな
 もうい人格構造になってしまふ。受験競争の低年齢化で、
 近年そのような人格構造の子ども達がふえているのは大変心配
 なことです。

〈② 第1の柱 - 思いやり〉

~ 親子のスキンシップが「思いやり」を育てる
 ~ 人格の第1の柱は「思いやり」です。
 二の「思いやり」の心は、人が社会生活を営んでいく上で、
 最も大切な心の要素だと私は考えています。「思いやり」の教育
 が多くなければ、性みよい温かい社会が実現できません。
 二の最も大切な「思いやり」の心は、乳幼児期における両親
 (特にお母さん)とのスキンシップにより、促進されます。

乳幼児期に、どのように親子でスキンシップを築んだか、とい
 こが、その後の子どもの「思いやり」の心の発達に影響をもち
 たい。これは思春期以後にまで及びます。この点でも、乳幼児期
 は子どもの基礎を作る大切な時期なので、
 二の乳幼児期にスキンシップが不足している子どもは、その後
 において、い本も大きくなり、年齢が上がるに共にも育ちます。初
 不足を取り戻すことがむずかしくなります。二のようには、思
 いやりの心の「順調」に発達しない割合が多いです。

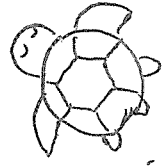
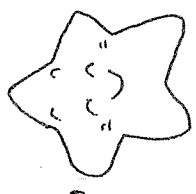
ですから、最も自然にスキンシップを楽しめる乳幼児期に、お母さん
 お父さんは子どもと十分に遊んでほしいと思います。そして、乳幼児
 期におけるスキンシップの大切さをしっかりと意識し、何となく自然な
 形でスキンシップが親で見えようとしてみられている。
 < スキンシップがよい >



私も二三年前、現在特に感じることで、同じ思いが持てておりました。
2005年の発行本で、10歳頃の現状が描かれています。

愛を求めるとは？

子どもたちの話を聞き、様子をみています。子どもたちはみんな愛を求めています。親の愛が伝わっていきいからですが、親も愛を伝えることがうまくなり、悩んでいるケースが多々あります。でも、本来愛するとは、何か特別なものをする必要はありません。子どもは親に常に何かを求めたり、存在ですが、求めてくれる子どもがいると幸せと感じる場合があります。愛を生み出す心持だと思えます。その心を言葉にすれば、「あなたに話しかけてくれるから、お母さんはうれいよ」というメッセージになるのではなないでしょうか。それは決して難しいことではないし、そういう思いを素直に伝える子育てをしてほしいと強く思います。



愛を失った子どもたちの様子を伝える話をうたさん耳にします。笑わない赤ちゃんとのお母さんの前ではよい子を演じる幼児の話があります。そして保育園では暴れて、甘えて、保育士を独占してしまったり、家に帰るとしてもお母さんをしてしまったり幼い話を聞くことが多くなりました。実際にはそういう子どもたちを見るとき、二の子はさきと愛を求めているに甘えられないと強く感じてしまいます。

また、高校生や大学生になった子どもたちの相談でも、「私は自分のほんこの心がわからないう。もう、このまじはいいし」と言って、幼い返りをする学生も、時々で見受けられます。幼い返りをするケースの中には、17、8歳の人が3、4歳半から4歳くらいまで戻るケースがあります。その場合、生活年齢は17歳とか、20歳ですが、お母さんが、お母さんを目の前にすると、

もう一度、私を最初から愛して、という気持ちが増え、幼い返りをすることがあります。

「20歳にもなつた息子さんが私の布団にもぐり込んでくつが、どうしていいですか」と相談にきたお母さんはいました。お母さんの状態を受け入れられずに悩んで相談に来られたのです。そのお母さんには、「子どもさんは、あなたに（お母さん）に愛を求めています。自分には自信が持てる素敵な若者に、もう一度、育ち直したいと言ってくれていいのです。その気持ちを受け入れてほしい」と伝えるしかありません。

その気持ちの理解です。と、図体の大きな男の子の息子が入ってくるだけで、違和感を感じてしまつた。この相談は、伝わりぬ愛に不安を感じながら、親の前で

「よい子」を演じて続けた子どもが、ほんこの自分を求めて、お母さんの前を受け入れてほしいと甘え直してしまつた。感じられるケースです。お母さんが素敵な子育ての仲間や保育園に出会い、適切な学びの場を持ち、子どもとのやり取りを楽しみながら、一歩一歩わが子を育ててきたなら、子どもは素敵な自分を育ててきたはずで、そして素敵な友人関係を築いてきたなら、子どもは風のような鬼畜期でさえ仲間の中で乗り越えていく子になるとつくづく思ふのです。

親と子の関係は、選ぶことができない関係です。世界や社会がどうあろうと、また子どもがどんな個性の持ち主であろうと、生まれてきてお母さんと子どもが思えるように、家族で子どもをほんこの守ることが必要です。これは「子どものため」という言葉のほんこの意味を誤解し、親が、親として育てるから子どもを育てていくに他なりません。元々が愛を伝える子育てへの第一歩だと、私は思っています。<手をのびて育てよう> 石本克行